

先週の講壇から

「この町の平安」

エレミヤ書 第29章4節-7節

聖句「その町のために主に祈りなさい。その町の平安があつてこそ、あなたたちにも平安があるのだから。」(29:7)

1. 《エクソダス》 映画『栄光への脱出』は、1948年のイスラエル共和国建国前夜を描いています。大戦後のユダヤ人難民が帰国船「エクソダス号」に乗って、民族の故地を目指して出発します。しかし、その大量移民と土地の収奪によって何十万というパレスチナ難民が発生するのです。「約束の土地」「エクソダス／出エジプト」とは何なのか、その信仰の裏面を見る思いがします。
2. 《約束の土地》 モーセに率いられたイスラエルの民がエジプトを脱出し、「乳と蜜の流れる地」カナンを目指します。これが「出エジプト」の物語ですが、このイメージは歴史の中で繰り返されます。ヨーロッパで宗教弾圧を受けた人たちが、大航海を経て北米大陸東海岸に入植します。信仰内容の違いから、更に「西へ、西へ」と奥地に入植する集団が生まれます。これが「西部開拓」です。しかし、先住民の人口は18世紀から19世紀の百年間で激減しているのです。公民権運動の指導者、キング牧師も「出エジプト」をモチーフにしていましたが、彼の考えるエクソダスは別の土地に移住することではなく、差別と抑圧、搾取、奴隷状態からの解放でした。この社会を変革して行くことだったのです。
3. 《踏み止まる》 確かに「出エジプト」のイメージは力強い。イスラエルの民の解放は「出る」ことで実現しましたが、エジプトでは大勢の幼子が命を断たれたのです。彼らが「入る」ことによって、カナン先住民は虐殺され、大量の難民が生じたはずですが、イエスキリストは私たちに「踏み止まる」ことをお示しになりました。預言者エレミヤも、抑留されている民に向かって、バビロンに留まり、その町のために祈るように告げています。世の中は不公平で不正義に満ちています。しかし、私たちはその中に生かされているのです。出て行くのではなく、変えて行くべきです。「愛がここにはないならば、愛を作らねば」(コルベ神父)。

朝日研一朗牧師